

総合文化学科の40年(下)

河 西 秀 哉

「総合文化学科の40年(上)」(『学院史料』第30号、2016年)では、1976年度に社会学科から総合文化学科へと変化する過程、その後のカリキュラム変化、そして1993年度に家政学部から人間科学部への改組に伴って総合文化学科においても専門教育が社会研究系、日本文化系、西洋文化・思想系という三つの系に再編され、カリキュラムが変更された状況を書いてきた。続くこの(下)では、その後、現在の総合文化学科に至るまでについて述べたい。

実は1990年ごろより、英文学科を含めた文学部改革構想が登場していた。その背景には、家政学部の再編という学内事情ほか、18才人口の減少期の接近、女子学生の文学部離れの進行という大学全体を取り巻く環境の変化があった。^①こうした社会の状況を踏まえ、1990年11月14日に17年ぶりに文学部教授会が開催された。そして、1991年5月には金城盛紀(英文学科)文学部長が文学部の将来のあり方について、そのたたき台として「新学科私(試)案」を提出する。それは、「数の確保を目指すより、質の良い者の入学を期待するという観点から、新しい世代にとって魅力があり、かつ神戸女学院の伝統と合致するものとして」構想されたという。その私(試)案は各学科に持ち帰られ、検討が重ねられていった。

1992年5月の文学部教授会では、各学科からの検討内容が報告された。英文学科は「状況の変化により、新学科を考える時に来ている」という点で合意したが、総合文化学科は「新学科設置案に代わり、既存の学科をより発展させ、両学科の交流を活性化することにより、文学部の充実をはかる」方がよいとの意見であった。総合文化学科は、前述のように1993年度からカリキュラムの変

更がすでに決定しており、新学科を設置して目玉とするのではなく、学科の充実が図られているからこそそれを打ち出すこと、また充実させていくことが「新しい世代にとって魅力」になると考えたのではないだろうか。

その後、各学科から3人ずつ選出された文学部将来構想委員会が討議を重ね、一方で各学科でも文学部改革について話し合われた。構想委員会は1993年4月16日に「神戸女学院大学文学部改革に関する答申」を提出する。そこでは、先の文学部長の意識を共有しつつも、「①英文と総文との間の壁を低くする」「②知識、情報よりも思考力、問題解決能力、想像力に重点をおいた教育を目指す」「③諸科目間の総合と連繋を図り、有機的連関をつける」「④学生のより自由で多様な選択を可能にする」「⑤現代の社会的要請に対応する(社会人の受け入れ、国際化に対応した語学教育)」が基本方針として示された。新学科設置という方向性はここでは消えている。具体的には、まず第一に、英文と総文の相互開放科目を増加させ、合同ゼミや合同講義を開講することなど、相互の垣根を低くすることが求められた。学科間のコミュニケーションを密にし、文学部としてのまとまりをもたせることで、様々な状況を乗り切っていこうともしていた。第二に、外国語科目も文学のみではなく時事的なものを含めること、中国語や朝鮮語も選択必修科目に含めることなど、新しい時代のニーズに応じた教育を求めていた。こうした取り組みは、おそらく前述の総合文化学科からの意見に近いものではなかったか。

総合文化学科教授会のなかでは、「文学部改組の必要性は、総文よりもむしろ英文の側の問題から出ているように思われる」との発言も出ていた。^②これは、文学部改革構想の提起が英文学科出身の学部長よりなされ、しかもその私(試)案が新学科設置構想だったことからそのように感じられたのではないだろうか。たしかに、この時総合文化学科の学科長であった高島進子名誉教授は、後に「文学部も、女子学生の進路志望の変化など、英文学科と総文が一体となって学部これからを考える時でありましたが、しかし、すでに学部としての機能が十分働かなかったことも反省点としてあるように思います」と回想している。^③英文学科と総合文化学科では、どのような文学部改革がよいのかをめぐって、

必ずしもコンセンサスがとれていなかったことをうかがわせる話だろう。その妥協点としての構想委員会の答申ではなかっただろうか。

その後、文学部のまとまりを強化する目的で、英文学科と総合文化学科の事務室が統合され、文学部事務室となった。また、文学部事務長も置かれ、事務のレベルでの再編が図られる。また、カリキュラムにおいても検討がなされた。

その後も、総合文化学科では学科のカリキュラムなどの充実が図られていく。1997年度には「少人数という総合文化学科の理念に照らして、専攻ゼミの人数を制限すべきではないか」という提起がなされた^④。ゼミの充実、少人数教育の徹底という命題は、その後も総文のなかで改革の柱となったと思われる。この提起を受けた話し合いが重ねられていくなかで、ゼミ全体についての問題性がクローズアップされていき、検討委員会が立ち上がった。専攻ゼミについては、受け入れの原則人数を13名として定める一方、できるだけ学生の希望も考慮できるようなシステムが目指された。

また、同年には優秀卒業論文を製本しようとする動きも出てくる^⑥。これは、優秀な卒業論文を書いた学生を賞賛する仕組みでもある。ゼミや卒業論文の充実化を図ろうとする動向の一つであった。これは、1999年度から優秀卒業論文を集めた『岡田山論集』の発刊へとつながった。

ゼミでは、2年生の語学ゼミ(I)が次第に改革の対象となっていく。「2年の授業に対する満足度が低く、少人数ゼミの必要性があること。4年のゼミが就職活動の為、困難となっており、専攻ゼミ期間が実質的に減少していること」がその理由に挙げられている^⑦。これは、社会状況の変化、大学の「生き残り」という状況を考え、2年生のゼミを専攻ゼミのプレゼミ化しようとする案でもあった。一方、それでは語学力を低下させるのではないかという危惧も出された。最終的には、2000年度より語学ゼミを文献研究ゼミと名称変更し、2年生は(I)、3年生は(II)として、(I)では専門に特化せず基礎となるような学力の涵養が、(II)では従来の語学ゼミの形で2000年度より開講されることとなった^⑧。

時を同じくして、1999年ごろより文学部改革の動きが浮上してくる。その端

緒は、松澤貝子学長より大学全体の「将来構想」について学部長会で話があったことによる^⑨。学長は「一学部構想」を提唱し、学部・学科を超えて神戸女学院大学を再編しようと考えた。それは、大学をとりまく厳しい社会的環境に対応しつつ、教育水準を維持するためのダウンサイジングと教員のアクティビティ向上という二つの目的から構想されたものであった。総合文化学科でもそれに基づいて、文学部改革や学科再編に関する話し合いが重ねられていく。当初、総合文化学科と英文学科を一学科とする案、国際関係の第三の学科を作る案なども構想されたようである。総合文化学科のなかでは、学長から示された「一学部構想」はそれほど検討されなかったように思われる。そして様々な意見が出たものの、最終的には総合文化学科のなかに国際関係のコースを新たに設ける案で一致していく^⑩。

そこで、それまでの社会研究系、日本文化系、西洋文化・思想系の三系から、現代国際文化コース、日本アジア・文化コース、人文・ヨーロッパコース、現代社会・福祉コースの四つのコースへの再編が2001年度より行われた。その際、英文学科より三名の教員が総合文化学科へ移ったほか、英文学科との相互科目が増加し、また専門教育科目を含む共通科目から114単位を自由選択とするような改革が行われた^⑪。新しい国際化社会に対応する形で、そうした専門を学べつつ、しかし総合的に学ぶという姿勢は堅持されたとと言える。

この四コース制はしばらく安定的に続いていく。その後、2010年度になると科別教授会では、「総合文化学科の授業改善、改革、将来構想」といった議題が話し合われるようになる^⑫。具体的には、まず第一に、卒業論文の指導・評価について、基礎ゼミ・文献ゼミのガイドライン、成績評価の問題など授業やカリキュラムの問題である。第二に、総合文化学科独自の学術企画や出版、教育、入試などの問題である。そして第三に、資格や他学科との問題、四コース制をめぐってといった将来構想の問題が話題となった。こうした話し合いのなかで、「総合文化学科の『良さ』を外部に宣伝し、『今より学力の高い受験生』あるいは『質の良い受験生』を確保」しようとする動きが高まってくる。

そして、そのための総合文化学科の改革の動きが起こっていく。そこで、

2013年度より四つのコースは、宗教学、欧米の文化と歴史、哲学・倫理学・美学、社会学・メディア、日本語・日本文学、経済学・法学・国際関係論、日本・アジアの文化と歴史、社会福祉・子どもの八つの科目群へと変化し、学生は主専攻24単位、副専攻12単位を履修する仕組みとなった。

卒業論文についても、それまで日本アジア・文化コースのみで開催されていた中間発表や卒論発表会が学科全体で開催されるようになった。また、学術企画としては、『日常を拓く知』シリーズが世界思想社より刊行されている。ここでは、一つのテーマを様々な学問から考察し、総合的に考えるという学科のスタイルが生かされた。

こうして、総合文化学科は2016年に40年を迎え、現在に至っている。

註

- ① 「1982年度～1997年度 文学部教授会」文学部事務室蔵。
- ② 「科別教授会議事録 1994年度～1995年度」文学部事務室蔵。
- ③ 高島進子「『文化の日』に思う KC 総合文化学科の学び」(『海図なき時代へー総合文化学科二十五周年記念講演会報告書一』神戸女学院大学文学部総合文化学科、2002年)16ページ。
- ④ 「文学部総合文化学科 科別教授会議事録 1997年度(12月～2月)」文学部事務室蔵。
- ⑤ 「文学部総合文化学科 科別教授会議事録 1998年度(4月～10月)」文学部事務室蔵。
- ⑥ 前掲「文学部総合文化学科 科別教授会議事録 1997年度(12月～2月)」。
- ⑦ 「文学部総合文化学科 科別教授会議事録 1999年度(4月～7月)」文学部事務室蔵。
- ⑧ 「文学部総合文化学科 科別教授会議事録 1999年度(12月～'00. 2月)」文学部事務室蔵。
- ⑨ 「文学部教授会 1999年～」文学部事務室蔵。
- ⑩ 前掲「文学部総合文化学科 科別教授会議事録 1999年度(12月～'00. 2月)」。
- ⑪ 「文学部総合文化学科 科別教授会議事録 1999年度(2000. 3月)」文学部事務室蔵。
- ⑫ 「科別教授会 2010年度」文学部事務室蔵。

(名古屋大学准教授)